

建築士会活動は 自他共栄のブーメラン



栗原幸夫

群馬建築士会 相談役
まどか建築研究室 主宰
—
1929年生まれ。前橋市立工業
短期大学建築科卒業



群馬の木を使った家づくり

当士会は県内12支部で構成され、本部傘下7委員会は自主的自治的規律をもって活発な研修と積極的な活動をしている。会員数1,677名のうち、専攻建築士244名が各々の専門領域を中心に自主と共催を通じて地域に貢献している。

群馬県は杉材を中心とした林産県で、県土の約68%は豊かな森林である。県環境森林部は早くに、県民の家づくりに群馬の木を使うことが森林と環境を守ることになると着目し、平成12年度から「ぐんまの木で家づくり支援事業」を立ち上げ、年間約800棟を越える家づくりを支援している。当士会も木材の含水率測定やヤング係数および製品の目視検査等の協力支援をし、県民からも安全安心の家づく

りができるという高い評価を得ている。平成22年「略：公共建築物等木材利用促進法」の施行により、低炭素社会の実現にも極めて大きな意義がある。

また、建築生産と建設労働災害防止活動とは不離一体のものがある。県労働災害防止協会の労働安全技術の専門教育に士会として関係法令に準拠しながら労働災害の未然防止に専門性を発揮し、その実効性に力を注いでいる。

青年委員会・女性委員会も歴史的建造物の保全と活用の専門家講習会に積極参加し、すでに桐生支部では伝統的建築物群保全地区の調査に入り、文化庁や国交省の関係法令等のマニュアル作成に参加し、技術技能を生かしている。女性委員会は建築環境、省エネ技術講習会等の講師として多くの施工者、設計者講習会に汗を流し新機軸を発揮している。

運庵大師の如き風貌の渡辺会長は、日頃から一般社団法人の主旨を満足するよう会員の活動への積極参加に技術と心のベクトルを向けようと主張しており「社会貢献という尽くしがあって建築士の社会的意義とステイタスの確立がある」と胸を張っている。

群馬

北から南から

高等学校家庭科 住居分野授業への 出張講座



工藤美智子

北海道建築士会女性委員会
副委員長
札幌支部 理事
工藤建築設計室 主宰
—
1962年生まれ。(株)佐々木
建設、(株)越後建築設計事務所
などを経て現職

北海道建築士会は、平成25年度北海道建設部から、地域における住教育実践業務「建築士による家庭科住居出張講座」を受託した。これは、地域における住教育のモデル的な取り組み等を通じて、将来の住まい手や住みづくりの担い手となる子どもの住意識向上を図ることを目的としている。委託内容は、道内の希望する高等学校で地域の建築士等が高校生向けの実践教育を行うとともに、地域における住教育の担い手となる建築士を養成するというものである。具体的には、家庭科授業で専属講師のいる5グループに分け、一人暮らしの間取りを各自作成する。高校生にとっては近い将来であるため現実的に考える生徒もあり、とても楽しそうである。教諭からは「指導方法を学ぶことにより住居分野授業のヒントが得られた。今教材を使い、来年実践してみたい」と感想をいただいている。

家庭科は生きる力を育む教科だという。しかし、保育・食物・被服・消費分野に比べ、住居分野にける単位の少ない学校が多いようである。住まいは私たちが生きるうえでとても大切なものだが、あまり

に身近すぎて毎日の生活では無関心な人が多いようである。何か問題が起きたときには、自分は素人だからわからなかったと答える人が多い。子どもたちが将来賢い生活者になるためにも、学校教育で全員が学ぶ家庭科は、住教育の大切な機会である。

家庭科教諭からは「教科書の範囲が広すぎて、何をどのように教えてよいのか不安がある。難しい分野だという先入観からか、住居分野に当てる時間数が少なくなる傾向がある」と意見が寄せられている。この出張講座が、「自分の暮らしを考えることは楽しいことだ」と気づききっかけになり、多くの学校で住居分野の時間数が増えることを期待している。

平成25年度は高等学校2校4クラス、教諭向けセミナーと建築士向けセミナー各1回を開催した。北海道は広大であり公私立合わせて300校ほどの高等学校がある。今後3～4年の継続開催になりそうだ。

家庭科授業でのグループ指導風景



北海道

岩原川プロジェクト



鉄川 進

長崎県建築士会 長崎支部長
(有)鉄川進一級建築士事務所
代表
—
1956年長崎市生まれ。長崎大学
大学院修了。ゼネコン、施工
会社を経て2004年より現職。
長崎大学工学部非常勤講師



ワークショップの様子

長崎市の中心部を流れる岩原川は、市内の山を源流とし長崎港へと流れる全長1.6Kmほどの小さな川(都市下水)である。下流付近は長崎で最も古い港だったと言われ、河口近くを埋め立てながら今の川の形を形成した。戦後の混乱が続く昭和30年頃に、付近の闇市や違法建築を撤去するための代替地として、行政がこの川の下流部分を暗渠として大黒市場と恵比須市場という2つの市場を建造した。

その後長い間、この市場の店舗は市民の台所として親しまれてきたが、床板の老朽化による危険性が問題となり、平成24年度に解体撤去された。60年ぶりに川面を表した川は新しい景観を創りだしている。おりしも付近には新しい長崎県庁舎や、九州新幹線の長崎駅が整備されることが決定しており、賑

長崎

北から南から

「木」を使う —建築士の社会的責任—



中村公一

三重県建築士会
中村建設(株)
—
日本大学工学部建築学科卒業。
田中小西建築事務所を経て、
1968年より中村建設(株)

私は今71歳になるが、子どもが生まれる時から、地球環境や地域の自然環境の汚染や破壊に対して、大きな関心を持つようになった。そのような中でオイスカというボランティア団体にも出会い、東南アジアを中心に植林ボランティアにも参加してきた。

そのような下地があったからかもしれないが、今から15年ほど前に、最も身近な住環境について研究しているグループに入るようになった。そのグループは富田辰雄という大工職人がつくったグループで、1966年エール大学教授ハンチントン博士の論文の一説から、住宅が「中心的生活環境」であることに気づかされ、その住宅環境作用が住む人の人生、すなわち人の幸不幸を左右するものだというのを教えられた。私は住宅を提案・提供する者の一人として、その責任の重要性を感じ、住みづくりに取り組んでいる。今、住宅業界も少し、環境のことに関心を持つ業者も出てきているが、まだまだのように思う。

環境があらゆる生物を支配していることを否定する人はいないと思う。住宅づくりにおいては、自然と調和し、共生できる正しい住宅環境づくりが急務

わいのゾーンが形づくられることが期待されている。

このようななかで、この地域の周辺整備とまちなみづくりの枠組みを住民参加でつくっていくことになり、長崎市から景観整備機構の指定を受けている長崎県建築士会が、その業務を担うこととなった。

整備内容を検討するワークショップは、沿線住民および河川愛護団体等の住民で構成され、地元長崎支部のメンバーがファシリテーションの専門家とともに企画運営している。これまで4回行われたワークショップでは、市民の皆さんのこの地域に対する思いや要望をまとめ、事業者である長崎市に提示していくことを繰り返すことによって、行政が行う事業計画が、より市民が望む都市環境の整備に近づいていることを実感している。

この事業は行政との契約であり、対価が支払われる。建築士の専門性から言えば十分なものではないが、今後このような枠組みを拡大させていくことによって、建築士会としての事業の発展が期待できる。そして何より、参加してくれた若い建築士諸君の、まちづくりに対する責任や意欲がさらに増していくことであろう。

と思う。特に、再生可能な材料であり、すべての生き物が好み、朽ちてもどのような環境にも弊害を生じず、また生物に必要な水を溜め、酸素をつくる上でも重要な働きをする木材を使わない手はない。

心ある林業家に言わせると、今、日本の森林は本来の機能を果たしていないという。住宅はもとより、子どもたちが勉強する学校や幼稚園から大学まで、すべての建物にこの「木」を使うことが、森林を再生させ、壊れかかっている自然の循環を元に戻すことが、私たち建築士の役目であるように思う。

皆様はどのように思われるだろうか？

「森林ツアー」で間伐材などの伐採を体験



三重